国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成23年12月1日発行　第35巻第12号通巻第411号

月刊みんぱく

2011 12月号

〔特集〕ポピュラーアートって何？

笑いがはらむ豊かさ　川口 幸也
「ポピュラーでないアート」を越えて　後小路 雅弘
「神さま絵画」の今日　三尾 稔
グアダルーペの聖母像――歴史の変転がつくった「民衆の聖母」　岡田 裕成
「アート」と不釣り合いな日本マンガ　ジャクリーヌ・ベルント
美術としての刺青　宮下 規久朗

エッセイ 千字文

男もすなるボクシングを女もしてみむ

ジョー小泉

プロフィール
1947年神戸市生まれ。神戸大学工学部卒。ボクシングマニアで17歳から米国『リング』誌通信員。三菱重工業勤務の後、国際マッチメーカー（交渉人）。2008年、日本人として2人目の国際ボクシング名誉の殿堂入り。岡山大学客員教授（スポーツ科学）。

「六〇の手習い」という。ものを学ぶに遅すぎることはない。還暦前、ボクシング会場の喧騒のなかで書道家に声をかけられ、「もう一度習字をしたいと思っている」と応えた。それから徳村旭厳氏より文房四宝（筆硯墨紙）すべてを贈呈され、手本を頂戴し添削を受けることになった。

以後七年、歩みはのろくやっと五段まで来たが書道の世界は実に奥が深い。「目習い」といって優れた手本を見て感覚を磨き、名蹟を幾たびも臨書（模倣）せねばならない。大家といえども、つねに王羲之、顔真卿などの基本にもどる。

かなは漢字から派生したもので、その名作のひとつに高野切第一種がある。古今和歌集をかな書きしたもので、紀貫之筆といわれる。その書は優美かつ繊細である。貫之は「土佐日記」の最初に「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり」と書いた。

ここで話を転じ、男のみすなると思われてきたボクシングに女性が参入している現状について書きたい。九月下旬、東京で女子だけの三大世界タイトルマッチが開催され、すべて日本側が勝利を収めた。これで日本人女子の世界チャンピオンは六名となり、男子の王者数に並んだ。サッカーのなでしこジャパン同様、日本の女子は敏捷で勇敢だから適性があるようだ。

書道において漢字とかなはおのおの特徴がある。前者は雄渾、後者は華麗である。ボクシングでも男子は力強く、女子は軽やかだ。ただし、女子ボクシングはいまだ過渡期で、いずれさらにスポットライトを浴びるだろう。

来年のロンドン五輪大会で女子ボクシングが正式種目に決まった。ここで国際的注目を集め、優勝者たちがプロ転向すれば、一挙に女子ボクシングが開花する可能性がある。

以前、筆者がマッチメークを手がけた女子の前WBAスーパーフライ級王者C（中国）は「アマチュアに戻り金メダルを狙う」という。それが許されるのか。かの国ならではの笑い話だ。

中国の人口は約一三億人で、本格的にボクシングに参入してきたら将来、強い女子選手が出現するかもしれない。北京五輪でも男子ではすでに二つの金メダルを獲得しているほどだ。余談になるが、一九世紀末、中国清朝で猛威をふるった義和団の乱を英語ではBoxer Rebellionという。中国にはコブシで闘う伝統があり、ボクシングと縁がなくはない。

この原稿のあとまた書道に戻る。いま書いているのが智永の「真草千字文」だ。つまり、この「千字文」の随筆から「千字文」の臨書へ。

月刊 みんぱく
12月号目次

1 エッセイ　千字文
男もすなるボクシングを女もしてみむ　ジョー小泉

2 **特集　ポピュラーアートって何?**
笑いがはらむ豊かさ　川口 幸也
4 「ポピュラーでないアート」を越えて　後小路 雅弘
6 「神さま絵画」の今日　三尾 稔
7 グアダルーペの聖母像
——歴史の変転がつくった「民衆の聖母」　岡田 裕成
8 「アート」と不釣り合いな日本マンガ　ジャクリーヌ・ベルント
9 美術としての刺青　宮下 規久朗

10 研究フォーラム
ミクロな視点でグローバルな支援のメカニズムをさぐる
信田 敏宏
12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
切手の椅子
フィンランドの郵便博物館
近藤 雅樹
15 みんぱく私の逸品
セネガルのガラス絵
歴史と生活の記憶
三島 禎子
16 散策と思索の径
クリスマスタウンでの断想
アメリカ・ワシントン州シェルトン
横山 廣子
18 多文化をささえる人びと
あるベトナム語母語教室の軌跡
庄司 博史
20 歳時世相篇
お祭り三昧の年末年始
小林 繁樹
22 フィールドで考える
墓の手入れに行く日
松井 生子
24 次号予告・編集後記

〔特集〕

ポピュラーアートって何？

笑いがはらむ豊かさ

川口幸也（かわぐちゆきや）　民博 民族文化研究部

ポピュラーアートって？

ポピュラーアートとは、専門の美術教育を受けていない描き手や作り手による造形物を指すことが多い。今日では、世界じゅうどこの国でも美術を専門に教える学校や大学が整備されている。したがって、美術教育を受けたアーティストの流れと、それ以外の職人とされる集団はどこでもわかれており、その意味ではポピュラーアートと、その対となるファインアートのない国はない。

一口にポピュラーアートといっても多様だ。額縁に収まった風景画や木彫り、石彫りの彫刻から、染織、看板、本立てやペーパーナイフといったお土産品まで幅が広い。日本でも、風呂屋のペンキ絵をはじめ看板や刺青（いれずみ）など、その種類を数えればきりがない。

美術教育による裏づけの有無がファインとポピュラーの領域をわける指標だというものの、本当はこの点もあやしい。というのは、世界的に知られたアーティストでも美術教育と無縁な人も少なくないからだ。たとえば一九八〇年代に現代美術界の寵児（ちょうじ）となったジャン＝ミシェル・バスキアは、もとはニューヨークで建物や地下鉄に落書きをしていた一少年に過ぎない。もっと時代を遡れば日曜画家のアンリ・ルソーがいた。おそらくこれらの逆のケース、つまり学校で専門の美術教育を受けてポピュラーアートを描いたり作ったりしている人となると大勢いるはずだ。

またこちらは木下直之（きのしたなおゆき）氏の入れ知恵だが、ポピュラーの意味を「人気がある」ととらえ直せば、モネやルノワール、ピカソなどもポピュラーアートといえなくもない。さて困った。ポピュラーアートの輪郭がぼやけてきた。視点を変えよう。

愛され続けるそのわけは

美術館の展示室について、前からひとつ気になっていることがある。それは、美術作品を見て笑っている人をあまり見たことがない、ということだ。いや、まったく見たことがない、といってもいい。逆に街なかでは、何らかの造形物を目にしてその意表をついた見事な着想とユーモアに思わず笑ってしまうことがある。

じつは、ファインアートとポピュラーアートを隔てる分水嶺（ぶんすいれい）のひとつに笑いがあるのではないかと、わたしはひそかに考えている。

美術館ではなぜ笑う人がいないのか。アートという神をいただく神殿では笑うことは神への冒瀆（ぼうとく）であり、ご法度だからである。この点に注目すれば、ポピュラーアートは、美術館から締め出された、あるいは美術館を忌避したことによって、笑いへの水脈を保っている貴重な表現だということができる。

想像力あふれる笑いは、ときに既存の秩序をひっくり返してしまう。そんな笑いを、卑俗と見るか豊かと見るか。おそらくこのふたつの面は表裏一体なのだろう。卑俗だからこそ、笑いは底知れない精神的な豊かさを包蔵しているのである。もちろん、すべてのポピュラーアートが笑いを誘うわけではない。けれども、文字通りご立派なファインアートをよそに、ポピュラーアートが絶えることなく存在し、人びとから愛され続けている理由のひとつは、笑いがもたらしてくれるそうした豊かさへの根強い要請があるからではないか。

民博アフリカ展示『憩う』セクション。
床屋やカフェテラスに見られる色とりどりの看板は、ときにユーモアを感じさせる

「ポピュラーでないアート」を越えて

後小路（うしろしょうじ）雅弘（まさひろ）
九州大学大学院教授・元福岡アジア美術館学芸員

リキシャ　1994 年
福岡アジア美術館所蔵　撮影・藤本健八

「美術」とその周縁にあるアート

理屈をいえば、ポピュラーアート（大衆芸術）がありうるためには、ポピュラーでないアートがなければならない。このポピュラーでないアートのことを一般に、ファインアートあるいはハイアート、あるいはたんにアートとよぶ。日本ではそれを「美術」とよんでいる。そして、ポピュラーアートのほかにも、この「美術」と相互に浸食しつつ境界を接している領域がある。フォークアート（民俗芸術）やエスニックアート（民族芸術）、クラフト（工芸）などがそうであり、日本にはさらに「民芸」や「美術工芸」などという固有のジャンルもある。これら「美術」周辺の領域を明確に区分することは困難だが、ポピュラーアートに関しては、都市生活が生み出すものであろう。

日本において美術ということばが生まれたのは、明治五年のことで、外国語の翻訳語としてであったという。自らの内発的な必然性によってではなく、欧米に対する自己アピールの必要性から生まれたことは象徴的だ。その後、「美術学校」や「美術館」「美術展」「美術史」などが作られ、そこで教えられ、飾られ、言及されるものが美術となった。そのように美術が西洋渡来の制度として整えられていく過程で、同時にその制度の縁辺に、ポピュラーアートをはじめとする周縁アートを生み出していった。そしてアジアのほとんどの国では、美術は、さらに新しい制度なのである。

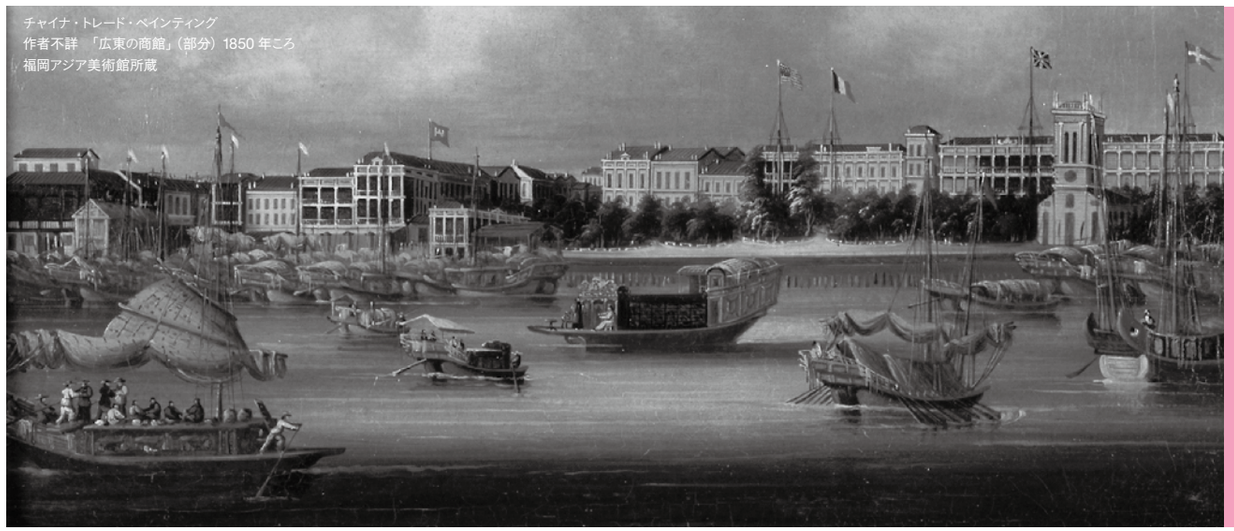
「美術」という制度を問い直す

わたしは、美術館学芸員となって一〇年余りが過ぎたころ、美術や美術館という制度の窮屈さに、次第に大きな違和感を抱くようになっていた。そこで、わたしは美術でないものを美術館に展示することで、その窮屈さをなんとかしたいと思った。「リキシャ・ペインティング――バングラデシュのトラフィック・アート」展（一九九四年福岡市美術館にて第四回アジア美術展特別部門として開催）は、そうして企画された。リキシャはバングラデシュの庶民の乗り物で、都市を走る人力タクシーであるから、どうみても「美術」などではなく、無名の大衆の芸術＝ポピュラーアートである。ただ、美術館制度に首までつかり、がんじがらめになっていたわたし（たち）は、制度への反逆を企てるにはあまりに無自覚で認識不足であったので、都市に生きるリキシャのダイナミズムを示すことができず、あくまでリキシャの一部であり、美術館に展示しやすい形式の〝ペインティング〟で展覧会を構成した。作者の名とともに絵画を壁に飾るという形式を打破する戦略をもっていなかった。そのためもあって、展覧会を見に来た人びとは、それを「美術」としてしか観ようとしなかった、せっかく「美術」でないものを展示したというのに。結局、わたしは美術だから美術館に展示されるのではなく、美術館に展示されたものが美術になるのだという逆説的事実と美術館という制度の強固さを思い知らされることになり、これは相当手強いぞとあらためて気を引き締めることになった。

というのも当時のわたしは「アジア美術館」というコンセプトの美術館を準備していて、たんにアジアという地域の近現代美術を展示する施設を作るのではなく、美術という欧米中心の価値のヒエラルキーや、美術制度を問い直したいと考えていたからだ。それがアジアに特化する美術館を作る意味だと考えていた。そこからリキシャ・ペインティングを皮切りに、チャイナ・トレード・ペインティング、インドやミャンマーの洋風画などのお土産物的なもの、上海ポスターや文革ポスターなど、ポピュラーアートなどもろもろの周縁アートもコレクションし、ポピュラーでないアートとともにいったんシャッフルして、「美術」を定義し直すことを目指した。美術館にアジアのポピュラーアートを展示することの意味は、たんに物珍しさや知られざる造型に目を向けることに留まるものではなく、わたしたちが当たり前のように信じている「美術」というものを、あらためて問い直すことにあるのだと思う。

文革版画　1966-1967 年
福岡アジア美術館所蔵

杭稺英／稺英画室
アンカービールのポスター　1930 年代
福岡アジア美術館所蔵



チャイナ・トレード・ペインティング
作者不詳　「広東の商館」（部分）1850 年ころ
福岡アジア美術館所蔵

リキシャ・ペインティング
サイード・アハメッド・ホセイン「リキシャの工房」1994 年
福岡アジア美術館所蔵

「神さま絵画」の今日

三尾稔（みお みのる）　民博 研究戦略センター

神さま絵画を祭壇に飾る（ラージャスターン州 インド、2008 年 10 月）

儀礼の一環として、神さま絵画に顔料をつける
（ラージャスターン州 インド、2008 年 10 月）

実用品としての絵画

一一月末に閉幕した企画展「インド ポピュラー・アートの世界」では、おもに二〇世紀前半インドで大量複製画として流通したアート作品を展示した。そのなかで目立って多かったのは神がみや神話の登場人物を写実画風に描いた作品であった。当時の人気画家たちは、西洋美術の技法を存分に吸収し、インドの神がみの世界を西洋風のアートとして表現したのである。だが、インドの民衆は、このような写実的な「神さま絵画」を別の文脈でとらえた。肉感的な神がみを自分たちにとってより身近な存在と感じ、絵画を礼拝の対象としたのである。祭壇に祭り、神がみと自分たちの視線を交錯させ、神がみの顔や身体に顔料をつけたり塗油したりする。神さま絵画は、視覚を中心とした五感を使って神がみと交渉する宗教的な行為には必須のアイテム、まさに実用品として大衆に求められたのである。

姿を変えてなお、暮らしに寄り添う

実用品としての写実的な神さま絵画は、インドでは現在も大量に生産され、日常の宗教的行為のなかで用いられている。さまざまな宗派や寺院が開設するホームページにも礼拝用のページがあり、極彩色の定型化した神さま絵画があらわれる。昨今の3Dの流行もすばやく神さま絵画にとり入れられ、角度を変えると複数のポーズが立体的に姿をあらわすホログラム技術による絵画が人気になっている。3D画像は肉感性の高さや、どこから眺めても見る者を見つめ返す点で、人と神との交流のうえではより理想に近いかも知れない。デジタル画像にせよ、3D画像にせよ、神像に直接塗油したり顔料をつけたりすることはできない。その意味では、視覚を通じた礼拝が強調されるようになっているが、神像の前に線香を供えるといった行為は守られ、五感による神がみとの交流という実践は現代でも維持されている。また、神がみの描き方も二〇世紀前半に確立した技法が踏襲されている。前世紀に作り上げられた神さま絵画の伝統は人びとの暮らしにすっかり定着しているといえるだろう。

実用品から観賞品へ

二〇世紀前半の神さま絵画は、しかし、別の文脈で現代インドによみがえっている。新しい富裕層が骨董品（こっとうひん）として当時の複製絵画を買い求めるようになっているのである。デリーのファッショナブルな通りにある古美術商などでは当時のポスターなどが結構な値段でとり引きされている。骨董品としての神さま絵画はもはや実用品ではなく鑑賞用として飾られる。当時の画家の意図は、約一〇〇年のときを隔てて皮肉な形で実現しているといえるのかも知れない。

古美術商の店内の様子
（ニューデリー インド、2010 年 5 月　撮影：福内千絵 民博外来研究員）

家々からもち寄った神さま絵画に拝礼
（ラージャスターン州 インド、1990 年 8 月）

グアダルーペの聖母像

歴史の変転がつくった「民衆の聖母」

岡田裕成（おかだ ひろしげ）　大阪大学准教授

メキシコ国旗とともに飾られるグアダルーペの聖母像

人びとの心をつかむ聖母像

およそ二〇〇〇万の人口を抱える巨大都市メキシコ市には、カトリック信仰が根強いラテンアメリカ諸国でも、ひときわ篤（あつ）い信仰を集める特別の聖母像がある。「グアダルーペの聖母」とよばれる聖画像だ。一九七〇年代に新築された巨大な聖堂に安置されるこの聖母像の前にはいつも、祈りを捧げる人が絶えない。聖堂の周りには聖母像の複製やさまざまの記念品を売る店が溢（あふ）れているし、特設のセットを背景に家族の写真を撮ることもできる。テペヤクの丘に広がるその広大な聖域は、人びとが祈りとリクリエーションの一日を過ごす、いわば信仰のテーマパークだ。スペインによる征服後、三世紀にわたる植民地時代と、独立後のおよそ二〇〇年を経て、海を渡ってきた聖母像はすっかりメキシコの地に根を下ろした。

時代にあわせて人に寄り添う

では、《グアダルーペの聖母》は、なにゆえこれほどまでに民衆の心をしっかりとつかんだのだろうか。しばしば語られるのは、メキシコ固有の宗教との習合だ。確かにこのテペヤクの丘には、征服以前から地母神的な女神をまつる聖域が存在した。だが、そのことのみに注目するのはいささか一面的だろう。というのも、「改宗先住民ファン・ディエゴの前に聖母があらわれた」との奇蹟（きせき）に始まるグアダルーペの聖母像の由来を初めて公にし、聖母像への崇敬を広めたのは、多くは植民地生まれのスペイン人――「クリオーリョ」とよばれる――のエリート聖職者たちであった。しかもそれは、その奇蹟が起こったとされる「一五三一年」からは随分と時を経た一七世紀の半ばのこと。彼らは、征服直後に遡って「奇蹟」を語るこの物語を通じ、メキシコの征服と先住民の改宗が、神の意志に適（かな）う行為であったことを示そうとしたのだった。テペヤクの丘の聖母像はこうして、「本国」に対する植民地メキシコのアイデンティティの拠り所とされていく。クリオーリョが主導したメキシコの独立戦争の際には、聖母像が彼らの旗印のひとつともなった。

だがグアダルーペの聖母像は、もちろん一握りの人びとの意のままに操作されてきたのではない。近代メキシコのナショナリズムと結びついた聖母像は、二〇世紀初頭の革命期には、蜂起したE・サパタの農民軍の軍旗にもなる。聖母像は、時々の歴史状況のなかで、さまざまな階層の人びとのさまざまな思惑を呑み込み、その度により大きな存在となってきたのだ。歴史の変転のなかで、ときに対立する利害や欲求に応えてきたことが、今もメキシコの人びとの感情を強烈に刺激するその存在感を、一枚の聖画像に与えている。

記念写真をとるためのセットもある

「アート」と不釣り合いな日本マンガ

ジャクリーヌ・ベルント
京都精華大学マンガ学部教授

1点のイラストに諷刺とユーモアがこめられたカートゥーン。ここでは作者自らが「これってアート?」と問うている。
Robert Crumb: Yeah, but is it art?, Alfred M. Fischer, ed., Verlag der Buchhandlung Walther König 2003

制度が決める

日本マンガはまさしく「ポピュラー」ではあるが、必ずしも「アート（芸術）」ではない。業界に支えられ文化として普及しているからこそ、アートの権威に頼る必要はもはやない。

日本でマンガを「芸術」とするのは、その読者ではなくたとえば文化庁だ。二〇〇一年の文化芸術振興基本法では、マンガは「メディア芸術」のひとつに位置づけられた。従来、「ファインアート」との対比でもちいられてきた「大衆芸術」という語を使用せず、あらたに「メディア芸術」という枠組みをもちだしたことは、上下関係を避けて「芸術」の範囲を横並びに拡大しようとする姿勢をしめしている。

マンガの批評力

そもそも英語の「アート」ということばは、現在日本語の「芸術」ということばから受ける印象ほど、威厳をもたない。

たとえば日本の読者に、マンガの表現手法を理論化した、アメリカのマンガ家S・マクラウドの『マンガ学』に親しんでもらうためには、英文に示された「アート」を「表現」と翻訳するのが得策であろう。また、日本の代表的な専門書『マンガの読み方』などを通して、ストーリーマンガ特有の文法を分析してきた研究が、「マンガ表現論」という名称で定着したことも、アートとマンガの関係を再考するうえで興味深い。

一方、芸術を排除しないマンガ論も日本には存在していた。一九六七年に出版された石子順造の『マンガ芸術論』と鶴見俊輔の『限界芸術論』はその代表だ。「芸術」としてマンガをとらえることを通して、マンガのもつ社会への批評力に着目した彼らの論考は、現代においてなお評価しなければならない。

しかし、マンガ業界の成熟とマンガ世代自らが評論する時代となり、言説の対象は社会全体から「オタク」などのコミュニティーとその嗜好へと内向きにシフトした。そして、カートゥーンや海外コミック、さらに現代芸術との交流はますます意識の外においやられ、石子らが「芸術」としてマンガをとらえた際、そこにそなわっていたはずの批評力は稀薄化している。

3・11という未曾有の災害に見舞われた今日、マンガが鳴らしていたはずの警鐘とその受け入れ方についてあらためて考えざるをえない。

膨大な作例をもとに「絵・コマ・ことば」等、マンガの表現手法に着目した専門書『マンガの読み方』（宝島社、1995年）

読者自らが

最後にもう一点。マンガとアートの不釣り合いは制度や言説に限らない。表現様式に対する受け手の態度もそれぞれ根本的に異なるのだ。

モダニズム以降、芸術作品の鑑賞は、表現の形態そのものや素材などに着目したうえで作品の意味合いを探求するという姿勢に特徴づけられてきた。それに対し、マンガの過半数は読書という過程を経ることで、個々の作品がもつ独自の表現ですら、ますます意識されなくなっていく。しかし、受け手は、「芸術」の制度や言説にとらわれず、マンガを「アート」と同様に、つまり表現自体に注目しながら読むことも可能なのだ。

フランス・ベルギーのマンガ「バンド・デシネ」。その個性派を代表する作家が 描いたのは、病を患う男と家族の物語
ダビッド・ベー『大発作』（明石書店、2007年）

【参考文献】
『美術フォーラム21』特集「漫画とマンガ、そして芸術」（醍醐書房、2011年）
小田切博「マンガ」という自明性　ガラパゴス島に棲む日本のマンガ言説」、Jベルント編『世界のコミックスとコミックスの世界』京都・国際マンガ研究センター、2010年、pp. 53-67
http://imrc.jp/lecture/2009/12/comics-in-the-world.html

美術としての刺青

宮下規久朗　神戸大学准教授

人類最古の身体装飾

今年の夏、須磨海水浴場の人出が過去最低になった。神戸市が刺青（タトゥー）の露出を禁止する条例を発したためだという。それで入場者が激減するとは、いかに多くの者がタトゥーを入れているかという証左である。現在、アメリカの若者のじつに半数近くがタトゥーを入れているという報告があり、日本でも近年、タトゥーを入れる若者が目立ってきた。しかし、同じ身体加工でも、ピアスや美容整形はすっかり市民権をえているのに、タトゥーのみがいまだに強い偏見にさらされている。

刺青は人類最古の身体装飾であり、太古から世界中でおこなわれてきた習俗である。現在も社会の最下層の者や囚人にまで広く行きわたっているが、逆に、芸術を享受するような階層には敬遠される傾向にあり、社会階層と結びついた民衆芸術であるといえよう。ただし、日本では本来、刺青は単なる身体装飾にとどまらぬ重要な芸術表現であった。

精神を肉体が融合する芸術

日本の刺青は、一八二七年に歌川国芳が『水滸伝』の挿絵を出版したことを機に大流行し、侠客や博徒だけでなく職人たちが競って刺青を彫った。具体的な絵柄が全身に展開する大規模な刺青は、世界でも類を見ないものであった。それらが往来にあふれ、日に照り輝いていた。しかし明治政府は一八七二年以降、刺青を禁止する。戦後ようやく合法となっても、一般人が入れることは少なくなり、いつしか裏社会やアウトローの刻印となってしまった。

全身に刺青を入れた人間は、自分の刺青の全容を見ることはできないが、他人に見られることによってそれを意識し、その人間性も刺青の文様と一体化させようとする。水滸伝の豪傑を背負った者はそれになりきり、龍を彫った者は天上雄飛の心を擬し、桃を入れた者は桃太郎のように鬼をも征する気概を示した。刺青は、本人の自意識と他者の眼差しとの合成物であり、自他の相互関係のうえに成り立つユニークな芸術であった。西洋の芸術概念にはない、肉体と人間性とが融合した生きた芸術といってもよい。

日本の若者たちが軽々しく入れているのは、ほとんどが欧米のヒッピー文化の系譜をひく稚拙なタトゥーにすぎないが、今でも日本の刺青は世界一といわれ、高度な技術が継承されている。

タブーであることが深みを増す

こうした芸術の公開展示、つまり露出を禁じることは、伝統文化の破壊につながりかねない。もっとも、タブーになっているからこそ、これを自らに刻む者にも相応の覚悟が要求され、社会の裏側であやしく輝くものになるといえよう。日本には、秘仏のように、秘匿されることによって価値を高める美術の伝統があるが、刺青の美は、幕末の社会とちがって公になっていないからこそ、深みを増すのかもしれない。弾圧や偏見に負けず、したたかに継承されていってほしいものだ。

歌川国芳《通俗水滸伝豪傑百八人一個　浪子燕青》

研究フォーラム

ミクロな視点でグローバルな支援のメカニズムをさぐる

信田 敏宏（のぶた としひろ）
民博 研究戦略センター

情報のグローバル化にともない、遠く離れた地域の状況を知り、その情報を世界の人びとが共有できる時代となった。それとともに人類学が研究のフィールドとしてきた周辺地域においても、NGOを代表とするあらゆる協力活動が生まれ、現地の生活環境にさまざまな変化をうみだしている。本研究では、人類学のミクロな視点を生かしつつ、NGOの活動現場における新たな人間関係とグローバルな支援のメカニズムをさぐりたい。

地球規模で広がる支援の輪

今日、NGOを代表とする市民社会のアクターは、人類学のフィールドにおいてより大きな存在となってきている。たとえば、わたしが研究のフィールドとしているマレーシアの先住民オラン・アスリ社会の場合、一九九〇年代以降、NGOがフィールドである村に登場したが、当時、NGOにかかわる村人はごく少数であり、実際にNGOがオラン・アスリ社会全体に与える影響も少なかった。しかし、二〇〇〇年を過ぎるころから、次第にNGOにかかわる人びとが増え始め、オラン・アスリに対するNGOの支援活動も活発化してきた。今日では、オラン・アスリの調査をおこなううえでは、NGOの存在を無視できない状況となっている。また、NGOが主張するさまざまな問題、たとえば、土地の所有権や先住民の権利に、人類学者自身も関心をもつようになっている。

NGOの登場によって、フィールドの村の人びとの人間関係に変化が生じてきた。従来、村の人びとは、血縁や地縁に基づく関係性のなかで生活を送っていたが、近年では、NGOを媒介として、それまでの血縁や地縁に基づく関係性を超えた友人・知人のネットワークが広がっている。村の人びと、特に若い世代の人びとは、従来は見られなかった新たな関係性のなかで生きるようになっており、たとえば、フェイスブックなどの電子メディアを利用し、グローバルなネットワークとつながることで、その関係性をさらに発展させている。

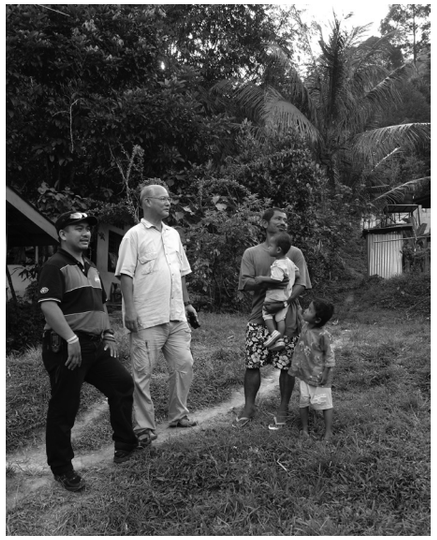
学生ボランティアが訪問したマレーシア先住民の村

おそらく、NGOと人類学が接近している状況や人びとの関係性が変化している状況というのは、世界各地でフィールドワークをおこなっている人類学者であれば、程度の差はあれ、実感している事柄なのではないかと思われる。他の地域の状況やNGOと人類学の関係性に興味を抱いたわたしは、民博の同僚と議論を重ね、その結果、NGO活動の現場に関する人類学的な共同研究プロジェクトを立ち上げることにした。

ミクロな視点を活用する

本研究の目的は、ふたつである。ひとつは、NGO活動の現場における人びとの新たな関係性を明らかにすることであり、もうひとつは、グローバル支援のメカニズムを人類学のミクロな視点を生かしてローカルな現場から解明していくことである。共同研究会では、NGO活動に参加するそれぞれのアクターがいかにして新たな関係性を構築しているのか、そして、ローカルな場における人びとの関係性がNGOを媒介にしていかにしてグローバル化していくのかを検討していく。さらに欲をいえば、グローバル市民社会論などの新しい市民社会のあり方について人類学の立場からアプローチしていきたいと考えている。

本研究はまた、NGOに関するこれまでの研究に人類学の立場から一石を投じるものになると期待している。従来、NGOの研究といえば、組織論や類型論などの「NGOはこうあるべきだ」という規範的な研究が多く、グローバルな組織とローカルな組織あるいは現場との複雑な影響関係を十分に把握しきれていなかった。その意味で、人類学研究である本研究は、ローカルな現場に着眼点を置くことにより、既存の研究に新たな考察を加えることができると考えている。


マレーシア先住民を支援するNGOスタッフ

「新しい市民社会」の構築を目指して

今日の世界では、電子メディアを媒介とした人びとの相互作用が、これまでにない速度でグローバルに広がり、ローカルな場へも深く浸透するようになってきている。人びとはインターネットを媒介として、自らが世界の人びとと直接つながっているようなイメージを抱くようになった。これは、従来、人類学のフィールドでは、あまり観察されえなかったイマジネーションのあり方である。NGO活動の現場でも同様の事態が起きているが、そうした局面の変化に対応した研究は、今のところ、あまり出てきていない。それゆえ、こうした側面に着目する本研究は、学術面と実践面の双方において、意義深いものになると考えている。

本研究の目指す方向の彼方には、「市民社会」をめぐる研究領域が広がっている。「市民社会」の理念そのものがグローバルに展開されている現在では、従来の西欧中心の市民社会論に対して、その限界が指摘されはじめており、「新しい市民社会」論の必要性が高まってきている。このような「市民社会」に関する議論の潮流に対して、本研究では、既存の市民社会論を発展させ、グローバル市民社会論などの理論を加えながら、「新しい市民社会論」の構築を目指したい。

また、本研究では、人類学的フィールドワークの問い直しもおこなっていきたいと考えている。研究者としての立場や学問の位置づけを考慮しながら、NGOとの連携を視野に入れた新たなフィールドワークの可能性について検討していきたい。

共同研究
「NGO活動の現場に関する人類学的研究
——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」
2011年10月～2014年3月
代表者：信田 敏宏

特別展

**「千島・樺太・北海道 アイヌのくらし
―ドイツコレクションを中心に―」**

会期　12月6日（火）まで
会場　特別展示館

■関連イベント

◆みんぱく映画会
**「Ainu Past and Present
―マンローのフィルムから見えてくるもの」**
日時　12月4日（日）13時30分～15時45分
（開場13時）
会場　講堂（先着450名）
※参加無料、申込不要
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布
お問い合わせ先
広報企画室　企画連携係
電話　06-6878-8210

◆ギャラリートーク
12月3日（土）

◆みんぱくウィークエンド・サロン
12月4日（日）
※詳細は24ページをご覧ください。

年末年始展示イベント「たつ」

2012年の干支である「たつ」をテーマに、みんぱく所蔵の資料や写真、世界各地の「たつ」にかかわる興味深い情報をパネルなどを使って、ご紹介いたします。また、本館展示場内の「たつ」資料を探しに行く催しも開催します。年末年始の1日を、世界の人びとと「たつ」のつながりを探ってみませんか？
会期　12月15日(木)～2012年1月31日(火)
会場　本館展示場内

INDAS 国際シンポジウム "Media and Power in Contemporary South Asia"

グローバル化のなかで発展する既存マス・メディアや、新技術に触発されたニュー・メディアが南アジアの社会や権力のあり方の変容に及ぼす影響を、多角的に検討します。（発表討論は英語。通訳なし）
日時　12月17日（土）、18日（日）10時30分～18時（両日とも）
会場　第5セミナー室
定員　15名
※参加無料、要申込
参加を希望される方は、氏名・連絡先を明記の上、左記のメールアドレスまでメールにてご連絡ください。
お問い合わせ先
人間文化研究機構「現代インド地域研究」プログラム　国立民族学博物館拠点事務局
E-mail: mindas@idc.minpaku.ac.jp

「たっぷりアメリカ―春のみんぱくフォーラム2012」

雪と氷の地、乾燥した砂漠や草原、熱帯雨林などの多様な自然。古代文明の興亡、ヨーロッパによる植民地化、アフリカやアジアからの移民などの重層的な歴史。そして、さまざまな人間と文化の出会いと交わり。アメリカの多様性と奥行を味わっていただくため、イベントをたっぷり用意しました。

会期　2012年1月7日(土)～3月25日(日)

■関連イベント

「アンデスの楽器「マトラカ」をつくろう」
日時　2012年1月9日（月・祝）13時30分～16時30分
会場　第3セミナー室及び第4セミナー室
※要申込、参加費840円（材料費など実費）
お問い合わせ・参加申込先
財団法人千里文化財団
電話　06-6877-8893
※たっぷりアメリカ関連のみんぱくゼミナールは左のページをご覧ください。
※この他にも様々なイベントを予定しています。お楽しみに！

「ウメサオタダオ展―未来を探検する知の道具―」
今春みんぱくで開催されていた特別展「ウメサオタダオ展―知的先覚者の軌跡」をバージョンアップしたもので、とくに「情報産業論」に関する展示が増えます。
会期　12月21日(水)～2012年2月20日(月)
会場　日本科学未来館
東京都江東区青海2-3-6
電話　03-3570-9151（代表）
http://www.miraikan.jst.go.jp/

●展示場新構築のお知らせ
ヨーロッパ展示とインフォメーション・ゾーンが来年3月に新しく生まれ変わります。それに伴い1月上旬にヨーロッパ展示が、展示場新構築工事のため閉鎖される予定です。今のヨーロッパ展示の見納めですので、ぜひ展示場に足をお運びください。

●休館日・無料観覧日のお知らせ
年末年始は12月28日（水）から1月4日（水）まで休館します。
1月9日（月・祝）成人の日は、本館展示を無料で観覧いただけます。ただし、自然文化園（有料区域）を通行される場合、入園料が必要です。
＊電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時（土・日・祝を除く）です。

刊行物紹介

■陳 天璽 著
『無国籍』
新潮社　定価：580円

横浜中華街で育ちながら、空港での入国拒否という衝撃的な形で、自らが無国籍者であることを知った著者。曲折を経て日本国籍を取得するまでを、多くの無国籍者たちのルポを交えつつ語った半生記。
（東京新聞 2011年10月2日文庫書評より）

■駒井 洋 監修、陳 天璽・小林 知子 編著
『東アジアのディアスポラ（叢書グローバル・ディアスポラ1）』
明石書店　定価：5,250円

日本、中国、朝鮮半島出身のディアスポラの離散過程と現在の状況を概観する。「国民国家」の枠組みや日本、朝鮮の単一民族幻想のため、移住先での個別研究の枠組でくくられ研究されることが多かった東アジア地域のディアスポラを一つにまとめ、比較検討する。

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は、観覧料が必要です）

第403回　12月17日(土)
中東のキリスト教徒―したたかなマイノリティ
講師　菅瀬晶子（国立民族学博物館 助教）
イスラーム教徒が人口の90パーセント以上を占める中東で、圧倒的少数派ながら、「イエスが生まれ育った土地」に生きる者としての誇りを持つキリスト教徒たち。あまり知られていない彼らの日常生活やイスラーム教徒との関係、歴史のなかでの役割を、パレスチナやレバノンなど、東地中海地域の事例をもとにご紹介します。

第404回　1月21日(土)
【たっぷりアメリカ―春のみんぱくフォーラム2012」関連】
アメリカ南西部先住民の宝飾品
講師　伊藤敦規（国立民族学博物館 助教）
きらめく銀、空色のトルコ石、太陽の赤のサンゴ。アメリカ南西部の先住民の宝飾品は広く世界に知られています。この地域の民族集団に特徴的な宝飾品の様式をご紹介するとともに、民族集団ブランドとして創出したホピ族の宝飾品産業の歴史と現状を詳しく解説します。

友の会

国立民族学博物館友の会　電話06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　国立民族学博物館 第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

◆「たっぷりアメリカ
―春のみんぱくフォーラム2012」関連
【フィールドワークの醍醐味を語る】
アマゾン川上流のキリスト教文化
―ボリビア、モホス平原の自然と歴史―
講師　齋藤 晃（国立民族学博物館 准教授）
アマゾン川流域の南西の端、アンデス山脈との狭間には、日本の総面積の約半分に相当する広大な平原が広がっています。高温多湿の厳しい自然環境における人びとの暮らし、そして西欧との接触以降の複雑な歴史を、わたしの個人的体験を交えてご紹介します。
第404回　2月4日（土）14時～15時
【フィールドワークの醍醐味を語る】
マヤから世界へ
―私のフィールドワーク体験
講師　鈴木 紀（国立民族学博物館 准教授）

◆「たっぷりアメリカ
―春のみんぱくフォーラム2012」関連
親子ワークショップ
1. **アンデスの楽器「マトラカ」をつくろう**
1月9日（月・祝）
2. **アルゼンチンのカーニバルの仮面をつくろう**
2月12日（日）
3. **ひょうたんの楽器をつくろう―ホビのくらしとお天気**
3月10日（土）
※すべて要申込。内容や費用などの詳細は上記友の会まで。

第64回体験セミナー
進化する日本酒づくり―伏見から世界へ（仮）
日時　2月26日（日）10時30分～16時
（訪問先）御香宮神社、月桂冠大倉記念館ほか
※申込先着順。内容や費用などの詳細は上記友の会まで。

今年の冬は暖かいアルパカと過ごしませんか

いま、南米産のアルパカをつかったセーターやカーディガン、手袋、耳あて帽などをたくさんとりそろえています。
生後1年のアルパカの産毛は「ベビーアルパカ」とよばれ、非常に柔らかく、保温性に優れています。それをつかった製品は、寒い冬でもほっこりあたたかく、冷えた体と心を包み込んでくれるでしょう。
お気に入りのアルパカを見つけに、ぜひミュージアムショップにおこしください。

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ
電話　06-6876-3112
FAX　06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

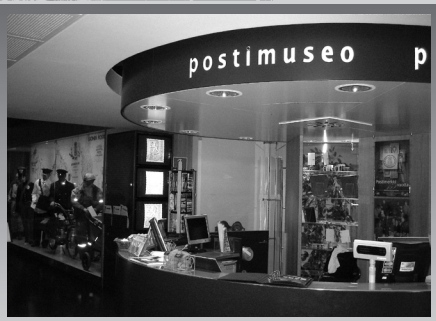
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

ポンチョ	14,700円
ベレー帽	1,575円
手袋	1,890円（すべて税込み）

※他セーターやカーディガン、ベストなど色々取りそろえております。

切手の椅子
フィンランドの郵便博物館

近藤 雅樹（こんどう まさき） 民博 民族文化研究部



郵便博物館 導入部（イントロダクション）

こんな椅子、見たことがない。椅子の全面に、世界中各地各国の切手がこれでもか、これでもかと言わんばかりに幾重にも貼り付けてある。

これは現代アートのオブジェか？

円筒形のショーケースに納められたこの椅子、じつはフィンランドの中央郵便局の一階にある博物館に展示されている資料である。ヘルシンキ駅前のターミナル広場に面して建っていて、フィンランドの郵政史関係資料がとてもわかりやすく陳列されている。子ども向けに（大人も乗れる）郵便配達用の自転車があって、ペダルをこぐと前方のスクリーンに吸い込まれるように街の景観が映し出される。

マネキンを使って見せる配達人の制服の変遷もおもしろい。むかしは大きな手押し車に郵便物を入れて運んでいたんだなあと、妙に感心した。

ホルン型のラッパは、ヨーロッパ各地の郵便局のシンボルマークになっている。むかしは遠方の町や村には馬車を駆けて配達していた。そのときに、ホルンを吹きならして注意を喚起するとともに、吹き方によって政府の郵便物であるかどうかを区別する通行上ある種の特権を誇示するものだったのだという。その合図で、一般の人たちは、遠くの町で寄宿舎暮らしをしている子どもからの便りなど、わが家あての郵便物があるかどうかを確かめたのかも知れない。

むかしの郵便配達料は受取り人払いでかなり高かった。そのため、封書の差出人は、署名に添えて符号をしるし、中身を見なくても安否を伝えるという方法もとっていた。配達人にとっては無駄骨だが、貧しい村人たちは、その符号を見るだけでこと足りた。切手が考案されて近代的な郵便制度が確立する以前には、そんな時代もあったのである。

配達を知らせるホルン。郵便局のシンボルマークにもなっている

世界各国の切手を貼り付けた椅子

みんぱく 私の逸品

セネガルのガラス絵

歴史と生活の記憶

地域 セネガル共和国
収集年 2000年

民博 民族社会研究部 三島禎子（みしまていこ）

みんぱく所蔵のガラス絵と名が付くものは三六三点、そのうち三三三点がセネガルで収集されたものである。そのほかに、ガラスイコンと分類されるものが一九八点ある。これらは東方正教の教会で用いられる、敬拝の対象としてのイコン（聖像画）をガラスに描いたものだが、アフリカにおけるガラス絵の変遷に深くかかわっている。

世界におけるガラス絵はガラス技術の向上とともに、一六世紀以後発展し、一八世紀から一九世紀にかけてボヘミアで大発展を遂げたといわれる。その後、オーストリア、ドイツ、フランスへ普及するとともに、ポーランドやルーマニア、旧ユーゴスラビアなどの東欧地域へも広まった。アフリカへは地中海地域から北アフリカのイスラーム世界へ伝わり、その後一九世紀後半にかけてサハラ砂漠を移動する人やものとともに西アフリカ地域へ渡って来たと考えられる。

セネガルに残存する初期のガラス絵にはキリスト教のモチーフを描いたイコンがあるが、しだいにイスラームや家族をテーマとする絵が主流になった。特に家族の肖像は、写真が一般的ではなかった時代、家の装飾品としても好まれた。植民地時代末期には、フランス人の個人収集家たちが競ってガラス絵を買い求めるようになった。その後、欧米における展示会などをとおしガラス絵は土産物としても発展し、絵のテーマは宗教だけでなく、おとぎ話や歴史、道徳、生活の場面、アフリカを象徴するものなど多岐にわたるようになった。

ガラス絵には古い形式を保っている東欧のイコンに共通する手法が見られる。たとえば、写実性を排した様式では、手や頭、目や首などが通常よりも大きく描かれたり、濃淡のない原色の色使いなどが特徴である。また、一定の構図と形式に則（のっと）って、同じモチーフが繰り返し描かれる点も共通する。しかし、ガラス絵が宗教的なものから世俗的なものへ、そして商品へと変わってゆくにつれて、手法やテーマも変化してきた。その移り変わりを見ると、人びとが残しておきたいと願う時代の記憶というようなものがテーマに選ばれているように感じる。

フォファナ作。今日も生き続ける伝統楽器奏者たちを、イコンとは異なる線型的な手法で描いた作品　H0222758

ゴラ・ンベング作。セネガルのガラス絵の草分け的作家。肖像写真がガラス絵に描かれた典型的な作風で、イコンに似た手法がよくあらわれている　H0222898

メッツォ作。村のコーラン学校の様子。印象派的な点描画でガラス絵の新しい作風を生み出した作品　H0222838

モール・ゲイ作。ンベングの伝統を受け継いで初期の手法で定番のモチーフを描く作家。奴隷貿易の記憶を描いたゴレ島に残る「奴隷の家」　H0222580

散策と思索の径

クリスマスタウンでの断想
―アメリカ・ワシントン州シェルトン

横山 廣子（よこやま ひろこ）
民博・民族社会研究部

アメリカ西海岸のシェルトンを再訪した。人口一万人に満たない町で、ダウンタウンもこぢんまりとしている。「9・11」一〇年の直前、テレビで特集番組が繰り返されるなか、この小さな地方都市の市街と郊外を歩いた。さまざまな岐路に立つ日本から来た者として、アメリカの社会と人びとの現状を見つめ、考えた。

水と森に恵まれた自然が美しいシェルトン付近の観光スポット、フッド運河

公共交通システムの導入と発展

ワシントン州メイソン郡シェルトン市は、シアトルから一三〇キロあまりのところにある。付近には針葉樹の森が多く、クリスマスツリーを出荷するクリスマスタウンとして知られる。一九七〇年代初め、わたしはこの町である家族と一年近く、生活をともにした。今回、シェルトンでは、友人らと旧交を温めることのほかに、個人的にやりたいことがふたつあった。

ひとつは、シェルトンの町を歩くこと。これまでに二度、再訪していたが、人びとの生活は車での移動が基本なので、彼らと一緒に過ごしていると、意外に町を歩いていなかった。この四〇年の変化を自分の足で歩きながら見てみたかった。

事前情報もえておこうと、初めてインターネットで町の情報を探してみた。バス路線があるのを発見した。メイソン郡は一九九二年からdial-a-rideシステムの公共交通システムを導入した。それは、車椅子でも乗りやすいボックス型相乗り車両に、乗客が電話で予約し、希望の場所で乗降できるシステムで、評判は上々だった。翌年から固定バス路線の運行も加わり、その後、郡外への路線、スクールバス路線との連結、大型バス車両の導入など順次、運営を拡大してきた。料金は郡内無料。有料路線では高齢者と障がい者、未成年への大幅な割引がある。最近では、適度な料金を徴収し、ボランティアのマイカーで、乗客を目的地まで送り届ける予約制のシステムもある。人工透析やがん治療のために遠方の都市まで通院する患者の大切な足にもなっている。

クリスマスツリー業とメキシコ系住民

シェルトン市内のバス路線には北循環と南循環のふたつがある。滞在先のすぐ近くの停留所に、一時間間隔で来ることを知り、早速、ダウンタウンまで乗ることにした。昼下がりの時間帯で乗客は少なく、老人や若者に混じって、ベビーカーを押す若い夫婦もいた。

車内表示が英語とスペイン語の二種類用意されていた。そういえば、友人が毎日、早朝に車で通う近くのアスレチック・クラブの様子を見に行った帰り、ひとりで隣のドラッグストアに入ったら、店員はメキシコ系で、スペイン語の商品が多かった。以前は見かけなかったので、「メキシコ系の人はどういう仕事についているの」と友人に尋ねると、「クリスマスツリーの伐採をしていて、地元の人の仕事を奪っている」と批判的だった。しかし、父親の代から町で新聞社を経営してきて、最近、会社を手放した別の友人は、「町のメキシコ系住民はすでに一三パーセント近くに上っている。何社もあるクリスマスツリー業者に取材したら、『地元の労働者は大歓迎だが、きつい仕事で誰も来ない』と述べた」という。町には、スペイン語のできる店員を揃えるスーパーもあるそうだ。

バス内に貼られた手洗いを勧める風邪予防法を説いたスペイン語のポスター

シェルトンの歴史ミュージアム内の先住民関連陳列ケース

カジノと先住民

シェルトンでやりたかったもうひとつは、市街から車で一〇分あまりのところにある、アメリカ先住民、スクォクスンの拠点に行くことであった。

一〇年前の訪問でカジノの存在を聞いて以来、心の片隅に留めてきた。アメリカ先住民によるカジノ経営は一九九〇年代以降、急速に発展し、ワシントン州には一八カ所もある。スクォクスンの場合はその成功例で、併設されるホテルは感じのよい重厚な造りであった。

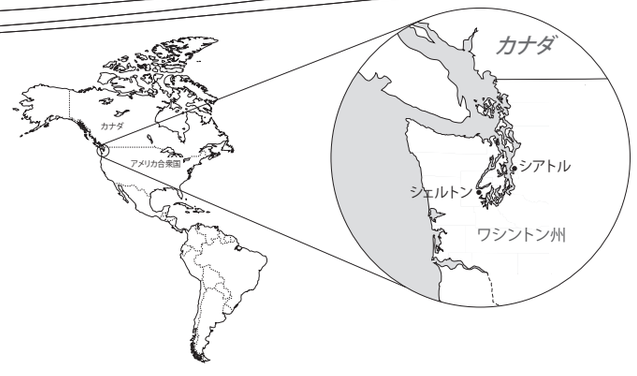
付近にはリサーチ・センターとミュージアム・ライブラリーもある。センターは多くの機能を果たすが、特に高齢者に対して昼食や憩いの場を提供し、立派なプールをもつなど施設も充実している。ミュージアムでは先住民の言語や手工芸などのクラスが開かれ、またゆったりとしたオープンな空間に、ものと図書資料が展示・収蔵されていた。

シェルトンのダウンタウンにあるメイソン郡の歴史ミュージアムの展示を思い出した。移住してきた白人の歴史が詳しくオープン展示されるいっぽう、籠細工など先住民関連のものは、小さな展示ケースひとつに押し込まれるように、他とは隔絶して置かれていた。先住者と移住者との関係は、まだ重苦しさが払拭されていない。

シェルトンの友人の多くは、大恐慌時代の一九三〇年代に、製材業に職を求めて他州から移住してきた人びとの子孫である。今また、若者たちによるウォール街の占拠が象徴しているアメリカの経済不況は、針葉樹に囲まれた静かな町の暮らしも脅かしている。経済状況や民族的出自など、異なるグループ間の軋轢（あつれき）の火種は数え切れない。しかし、町の人びとの姿を見ていて、変革のフロンティアに立ち向かおうとする人びとの英知も、この国には存在していると思った。

羽を広げたワタリガラスのデザインのスクォクスンのミュージアム・ライブラリー

クリスマスタウン、シェルトンの町のシンボル「ビッグ・ロッグ」



多文化をささえる人びと

あるベトナム語母語教室の軌跡

西山知美さんがベトナム人を両親にもつ子どもたちに、藤沢市善行でベトナム語を教えはじめて今年で8年になる。
西山さんの当時4歳だった長男も中学2年生になった。
最盛期であった5年ほど前には20人もいた母語教室の生徒たちは5名になり、
今では日本で生まれた子どもたちばかりになった。

庄司 博史
民博 民族社会研究部

日本語を母語として育つベトナム人の子どもにとって、ベトナム語は今や外国語である。かつて熱心に子どもたちとベトナム語教室の運営に協力してくれた母親たちの多くも仕事で手が離せない。この間、西山さんが教師としてかかわってきたベトナム語母語教室と地域のベトナム人コミュニティの変化をたどりながら、そのなかでもベトナム人として生きようとする人びとの努力をみてみたい。

ベトナム語教室のはじまり

西山さんが家族とともに難民として日本にやってきたのは一九八〇年代後半、一五歳のときであった。当時、親の世代の多くが日本語の壁にはばまれ、また制度や風習の違いから日本社会への適応に苦労するなか、彼らと社会との橋渡しで大きな役割をになったのが西山さんの世代である。それでも彼女が、必死に学んだ日本語で京都の女子高に自力で入学し、看護学校で准看護婦の資格をとるまでの苦労は、相当のものであったであろう。

やがてベトナム人の男性と結婚し子どもが生まれた。二〇〇三年、西山さんが善行でベトナム語母語教室をはじめたのは、自分の二人の子どもにベトナム語を教えようとしたのがきっかけであった。かつて参加したベトナム語教室での経験をもとに、彼女が自主的にまったくの自力ではじめた月二回の母語教室に、近隣のベトナム人児童と母親が集まった。筆者は二〇〇六年四月本誌で西山さんのベトナム語教室を移民のコミュニティベースの母語教育の試みとしてとりあげた。ベトナム語がとびかうクラスに移民言語教育の可能性を見た気がした。

ベトナム語教室の今

ベトナム語教室は読み書き能力を養ううえで欠かせないと西山さんはいう。たとえ家庭でベトナム語をはなしても読み書きは自然に覚えるものではないし、忙しい両親に手ほどきをうける機会はほとんどない。かといってベトナム語教室出席のために、学業や友人とのつきあいを子どもに犠牲にさせるほどの説得力はない。今その家庭でさえ、会話は日本語に向かいつつあるのが一般の傾向であるようだ。

とはいえベトナム語教室の客観的意義は決してなくなっていない。今日、公民館での教室利用に対して無料使用がみとめられ、ボランティアの支援で学校教科の補習も可能になった。昨年には公益法人かめのり財団から「第三回かめのり賞」で活動資金援助をうけ、注目度はたかまっている。これにベトナム語の社会的価値、有用性がみとめられるようになれば子どもたちの関心も向いてくるであろう。ベトナム語を学ぶ日本人が苦労する発音など初歩の関門はベトナム語を幼少のころ学んでいればどれほど楽なことか。

移民コミュニティの生き方

今日、ベトナム人は北米やオーストラリア、ヨーロッパ各地に分散し、生活の根をおろしている。その数は三〇〇万人といわれ、アメリカやヨーロッパに移住した知人の話など、西山さんもときおり耳にすることがある。起業で成功し、豪華な生活をおくっているひとの話は珍しくない。

また大きなベトナム人のコミュニティをもち、職場や日常の生活までベトナム語で用が足せる社会があることも知っている。

しかし、西山さんが一番うらやましいのは、彼らの子どものなかに医者や弁護士、音楽家など社会に認められる地位に到達できた人が少なくないことだ。残念ながら、日本ではそのような話はまだほとんど聞くことがない。自分の子どもにはできうる限り教育を受けさせ、自らの可能性を広げてほしいと願っているが、正直いって、両親が職場と家庭の往復に一日を費やす生活では容易ではない。なかでも子どもと過ごす時間があまりないのが辛いという。

善行のようにベトナム人の散住する地域で、日常の多忙におわれながら、ベトナム人コミュニティ活動を続け、ベトナム人としての存在を発信していくのは容易ではない。まして組織的な活動をあまり好まないベトナム人である。春節祭テトや中秋節など、にわか仕立てのお祭りをする以外、普段のつきあいさえ疎くなりがちだ。日本社会も、そのような流れにまかせて、彼らが日本人の一部になりきってしまうのを歓迎しているのかもしれない。事実そのような傾向も一部の若者にはみられるという。

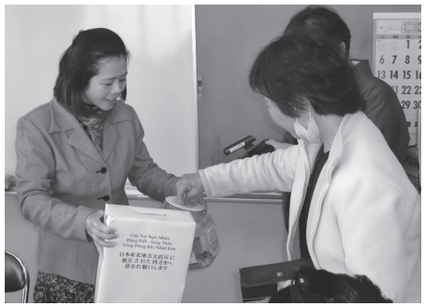
これから

今年三月一一日に起こった東日本大震災は在日ベトナム人にとっても大きな出来事であった。身内に直接被災した人はいなかったが、西山さんをはじめ多くのベトナム人にとって決して人ごとは思えなかった。人道的な共感もさることながら、同じ日本の住民として何かをせずにはおれない気分にかられたという。また、難民として受け入れられてきたことへの恩返しという気持ちもあった。おそらくこれは普段疎遠になりはじめていたベトナム人も同じ思いであったのだろう。

ベトナム語講座をおこなってきた善行の公民館にだれからともなく、ベトナム人が集まった。募金がはじまり、最終的には数十名からお金が寄せられた。行動したいという気持ちは東北から川崎市に避難していた人びとへの炊き出しへの参加にもつながった。

団体としての活動参加のため、名もない組織に臨時に「湘南ベトナム人グループ」と名をつけた。宗教的でも政治的でもない、存在基盤の薄い名ばかりの組織であった。しかし、西山さんにとって、たとえいっときにしろ、集まった多数のベトナム人の存在、そして久しぶりに会った仲間との絆を感じる機会でもあったという。

西山さんは、その絆を絶やさないためにも、参加する子どもがいる限りベトナム語母語教室は続けようと思っている。


東日本大震災の募金活動に参加する西山さん

今日ではベトナム語に加え補習支援もおこなう

かつては学力に応じふたつのクラスで教えていた

読み書きの修得にはきちんとした指導が必要だ

ボランティアの青年たちと

お祭り三昧の年末年始

小林繁樹（こばやししげき）
民博 文化資源研究センター

パプアニューギニアのマンドッグ島では、一二月の声を聞くと祭りの準備があわただしくなる。しかし、この季節は悪天候が続き、とても祭りの季節到来とは思えない。そんなとき、なぜ人びとはあえて祭りをとりおこなうようになったのだろう。そのわけを考えてみた。

年末年始は忙しい

いよいよ師走に入ってしまった。もう一年が経ち、すぐに新しい年がやって来るのかと、ときの過ぎる速さにあきれているうちに、街ではクリスマスセールや歳末セールが始まって、あわただしい思いにせかせられる。

この時期は、パプアニューギニア、シアシ諸島にあるマンドッグ島の人びとも、大きな祭りが続いて忙しい。クリスマスから新年にかけての休日で、伝統的な年中行事の多くをまとめておこなうようになったからである。

もともとマンドッグ島では、大祭は六月から七月に実施していた。この時期は南東貿易風が強くなる前であり、また主食のなかでも重要なヤムイモの収穫期にもあたる。天気もよし食べ物もありという、行事を催すのには最適な季節である。

そして逆に、一二月から一月にかけての季節は、過ごしにくい時期にあたる。北西モンスーン風が吹き、降雨も多く、蚊も発生し、漁獲が少なくなる。

さらに端境期（はざかいき）となり、ことに九月からの三、四カ月間は食料が不足する。祭りに十分な食べ物を用意する事は難儀なのである。しかもこの時期はイモ類の植えつけなど、畑作業がもっとも忙しいときでもある。

悪天候で家屋が浸水したり壊れることもあり、豪雨のために祭りが中断し、石蒸し料理など、ごちそうを調理し直すこともある。

しかし、自然の摂理に順応していた、いわば伝統的な暮らしは、強力な外部世界からの影響で変っていく。

キリスト教がやって来た

一九六〇年に、ごく近くの島にカトリック教会の司祭館と学校が建設されると、キリスト教の布教が本格的に始まる。マンドッグの島内に教会が建ち、六〇〇人余の島民全員がカトリック教徒となった。島の伝統的な創成神話はキリスト教のそれと習合される。教会暦は、暮らしを支えるたいせつな節目となってきた。

また、一九七五年にパプアニューギニア国として独立を達成すると、一二月二五日のクリスマス、翌日のボクシング・デー（クリスマスに続くキリスト教の祝日）、一月一日の新年の日が国の祝祭日として休日となった。

教会付属の学校は公立の小学校と変わり、税金も学校の授業料も必要となってきて、いや応なく貨幣経済に組み込まれていく。進学のために島を離れる若者が続き、公務員や教員となって国中を移動する転勤族となったり、町への出稼ぎや、町で暮らし始める家族も多くなった。

しかも、地元の祭りということで公立学校を休みにはできないし、土日では時間が短かすぎる。特定の日に天気が悪いと料理もできない。

そのような状況のなかで、島の人びとはクリスマス休暇に、祭りの開催日を移すことにしたのである。これから長い休日がとれ、都会に出かけた人びとも帰省できる。

祭りは続く

マンドッグ島社会では、特に長子にかかわる通過儀礼が重要である。祝い事としては一三種類ほどあるが、ことに男児の割礼、男女ともの初航海を祝う水かけと踊り初め（そ）め、男性の男子集会所組織への入社式は大規模となる。多くの参加者が集い、歌い踊り、大量の食べ物が調達され、分配される。

一二月に入ると、祭りの準備が本格化する。女性たちは舞踏用の腰ミノや腕飾りなど作り始める。また、近隣や遠隔地へ船で出かけては、イモ類やバナナ、ブタなどの入手に励む。かつてほどではないが、儀礼祭宴に使うブタ牙やイヌの歯、貝ビーズ、鳥の羽毛などの装身具、顔料、手太鼓なども入手する。今は店で買う米やビスケット、肉の缶詰、ビール、タバコ、コーヒーや砂糖も、大量に必要である。

教会の飾りや、台座や輿、密かに用意する祖霊の仮面や衣装など各種儀礼用具は、ころ合いを見計らって製作する。教会で披露する賛美歌や宗教劇、儀礼にともなう幾種類もの歌や踊りの練習も欠かせない。ごちそうを調理し、関係者に配るという大仕事もある。

重要な儀礼は合同でおこなう。ある年の例では、一二月一二日に六人分の踊り初めをおこない、その夜から翌朝まで踊り明かした。機関船が里帰りの家族と大量の物資を運んで来た翌日の二一日の朝には、三人分の、子どもの立ち上がりを祝う儀礼と水かけを、同時におこなった。そして午後から翌日の午前三時まで、歌い踊る。

二四日の深夜から二五日の未明には、教会でクリスマスのミサがおこなわれる。そして昼から翌朝まで歌と踊りが続く。二九日にはビーズの飾りつけ儀礼。三〇日の午後からは、島をあげての踊り初めが始まり、その夜から三一日の午前中に、仮面仮装姿の祖霊が出現して、割礼と入社式が実施された。その午後からは、祖霊に女性が混じっての歌と踊りとなる。

この年の一月一日は日曜日だったので、教会でミサがあり、午後からは祖霊が踊る。午後七時半ごろ、祖霊はお土産をたくさんもって、東の海に帰って行く。そして、翌二日の午前中に石投げの儀礼があり、一連の祭事が終わる。この間、人びとはごちそうを食べ、寝る間を惜しみながら、まことに濃密なときをすごすのである。

地域の伝統的な行事が年末年始に定まっていく様子は、クリスマスや成人の日の決まり方など、日本の場合を連想させる。小島に暮らす人びとの心のうちを、また改めて尋ねてみたい気がしてきた。

クリスマス・ミサ。教会のなかには、十字架、馬小屋とともに現地の伝統的なデザインをほどこした祭壇が設置されている。
また西欧人の神父のとなりには、ブタ牙で装った助祭役の青年が並ぶ（1988年）

フィールドで考える

墓の手入れに行く日

松井生子（まついなるこ）
民博 外来研究員

舟を降りて土手に上がると、そこは一面、黄金に色づいた稲田だった。稲田のなかにはコンクリートで区切られた一画があり、立派な門が立っている。そこが、わたしたちがめざす墓だった。

陰暦一二月二〇日の墓の手入れ

ここはカンボジアのプレイ・ヴェン州南部。ベトナムとカンボジアの国境に近く、内戦前からベトナム人が多いところである。わたしはこの地域の、メコン河沿いの村で調査をおこなっている。

毎年陰暦一二月二〇日、調査地とその周辺の村々に住むベトナム人は墓の手入れに行く。わたしはこの日、友人の父親であるタムおじさんに誘われて、調査地の東にある「小さな河」とよばれる河のほとりに来ていた。

ふたつの河川が流れるこの一帯では、雨季に河の氾濫で土地の大部分が水に沈んでしまう。乾季に入って水が引き、陰暦の新年節を前にしたこの日に、墓で草むしりをし、土饅頭（どまんじゅう）に土を盛り直すことが彼らの慣（なら）わしである。

「小さな河」沿いのベトナム人の家

タムおじさんとわたしが立ち寄った「小さな河」沿いの集落でも、家屋の脇や裏手にある墓で人びとがそれらの作業をおこなっていた。おじさんはこの集落に住む従兄と舟に乗り、そこからさらに川上の墓をめざした。彼らは父系を重視し、通常は父系祖先の墓の手入れをするのだが、この日向かったのはおじさんの母方祖父の墓だった。

内戦とベトナムへの移動を経て

カンボジアでは一九七〇年に内戦がはじまり、当時この地域の人口の大部分を占めていたベトナム人は戦火を逃れてベトナムへ避難した。一部の人びとは、強制労働や虐殺などがおこなわれたポル・ポト政権時代が一九七九年に終わった後にカンボジアに戻ったが、大多数はベトナムにとどまった。カンボジアに戻った人はその理由として、ベトナムでの生活が経済的にうまくいかなかったことを挙げることが多い。一九七九年以降のこの地域にはカンボジアの多数派民族であるクメール人が多数移入し、現在ベトナム人は少数派となっている。

「小さな河」沿岸の集落出身のタムおじさんもベトナムへの避難を経て一九八〇年代にカンボジアに戻ったが、親族の大半は今もベトナムに住んでいる。この日母方祖父の墓へ赴いたのは、本来その墓を管理しなければならない母方の親族がカンボジアにいないためである。

稲田の墓で作業をおこなう二人

稲田の墓に土を盛る

稲田のなかの墓

たどりついた稲田の墓は、冠水のあいだに盛土が流されてほぼ平坦になっていた。おじさんたちはナタで雑草を刈りとり、墓の敷地の端に置いた。次に土を掘って墓に盛り上げ、ナタとシャベルでたたいて固める。菓子と小さなグラスに注いだ酒をお供えし、線香を捧げた後、さらに土を盛る作業が続いた。

作業中に、近所に住んでいると思われるクメール人の若い男性が二人、墓まで歩いて来た。墓がつくられた時期を問う彼らに、タムおじさんは「五〇年以上前だよ」と気さくに答えていた。クメール人の小さな子どもたちもやって来て、おじさんが「お菓子だ」と、お供えした残りの菓子を渡した。

家に戻った後の語らい。右端の白いシャツの男性がタムおじさん

タムおじさんと従兄によって、墓にはこんもりと土が盛られた。彼らはその上に酒をかけ、帰途についた。墓がある場所は現在、クメール人の所有地となっている。おじさんは稲田のもち主に気を遣い、歩いたときに倒れた稲を立て直した。

隣国ベトナムにルーツをもつベトナム人は、カンボジアで「クメール人の領土を奪う」といわれ、しばしば社会の外部者であるかのように扱われる。しかしタムおじさんを含め、この地域出身のベトナム人は、自らがカンボジアに住むことの正当性を感じている。彼らがカンボジアに戻ったとき、内戦前までの所有地は既にクメール人に分配されていた。墓の大半はクメール人に耕されるなどしてなくなっており、タムおじさんの母方祖父の墓のように内戦前の墓が残っているケースは少ない。だが、現存する墓は、彼らが数世代にわたり、この地に根ざした生活を送ってきたことを示すものである。可能な限り続けられている墓の手入れは、幾多の変化のなかで、過去との連続性を維持しようとする行為のようにも思える。一方、墓でのタムおじさんの対応に見られるように、彼らはクメール人との対立を望んでいるわけではなく、穏健な関係を築いて生きていこうとしている。わたしがフィールドで出会ったのは、カンボジアで生きる、このようなベトナム人の姿だった。墓の手入れの後は従兄の家に戻って食事となり、たのしい団欒（だんらん）のひとときとなった。

12月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。
どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

4日（日曜日）
時間：11 時から 12 時
話者：伊藤敦規（国立民族学博物館 助教）
話題：【特別展関連】先住民と博物館資料
場所：特別展示館

11日（日曜日）
時間：14 時 30 分から 15 時 30 分
話者：小川さやか（国立民族学博物館 機関研究員）
話題：古着のゆくえ――先進諸国からアフリカへ
場所：アフリカ展示場入口

18日（日曜日）
時間：14 時 30 分から 15 時 30 分
話者：岩谷洋史（国立民族学博物館 機関研究員）
話題：【年末年始展示イベント「たつ」関連】
年末年始展示イベント「たつ」と職員研修会
場所：企画展示場 B

25日（日曜日）
時間：14 時 30 分から 15 時 30 分
話者：藤本透子（国立民族学博物館 機関研究員）
話題：カザフ遊牧民のイスラーム
場所：中央・北アジア展示場入口

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）

編集後記

本号ではポピュラーアートが特集テーマである。文化人類学はエスニックアートやフォークアートとは縁が深く、民博にも研究対象とする人が何人かいる。しかし、ポピュラーアートは、存在することはわかってはいても、正直いって私にはその輪郭がいまひとつ見えないでいた。今回、川口氏が提示した、「笑えるアート」は結構うまくいい当てている気がする。そういえば、エスニックアートでもフォークアートでも笑いをともなう部類は確かにある。その一方、いずれの分野にも審美者階層の出現により有名になり、プロ化したアーティストの作品は、笑ってはいけないファインアートに昇華していくのかもしれない。と、納得した気分でいるうちにつぎの話題にうつる。

「多文化をささえる人びと」は本号をもって終了する。わたしたちの周囲に生活する外国人や彼らを支援する人びとに注目しようとしたシリーズで、その前身の「外国人として生きる」とあわせると5年9カ月にわたる。執筆者はもとより、登場していただいた方々に感謝したい。次号からは、フェアトレードなどあらたな市民運動をとりあげるシリーズが始まる。ご期待いただきたい。（庄司博史）

●表紙：アフリカ展示場にある床屋の看板。
地域 ガーナ共和国　標本番号 H0231432

次号の予告

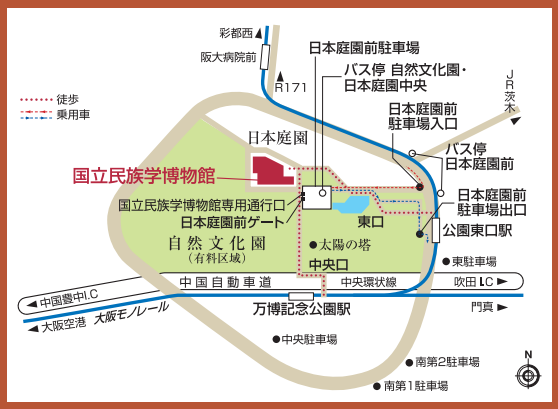
特集
辰

月刊みんぱく 2011 年 12 月号
第 35 巻第 12 号通巻第 411 号　2011 年 12 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

発行人　八杉佳穂
編集委員　庄司博史（編集長）　樫永真佐夫　川口幸也
久保正敏　菅瀬晶子　中牧弘允　山中由里子
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/